人類社会生態学研究会　1959. ~~12. 1.~~ 11. 24.　人文・分館
(IMANISI, UEYAMA, HUZIOKA, KATÔ, IIZIMA, ITANI, TANI. WAZAKI.)

マルクス主義の社会系統論　(坦当. 上山.)

人類社会系統論をMarxがどう考えるか，のあらましをのべてみる．必要な文献は．

1. 1845　ドイツ・イデオロギー
2. 1848　共産党宣言
3. 1857-8　資本制生産に先行する諸形態．
4. 1859　経済学批判．
5. 1867　資本論
6. 1884　(エンゲルス) 家族・私有財産．国家の起源．　——である．

この中で人類学の仲間にしられているのは⑥であるが，③も注目すべきものである．(戦後これを根據として大塚久雄「共同体の概念」がかかれた．)
①ドイツ・イデオロギーはMarxの最初の著作で，このはじめの部分に彼の思想の全ボーがでている．(即ち一種の人類社会発展史・「史的唯物論」の構想．)．それが③でくわしく展開され，方法論は④経済学批判の序で定式化された．(それは上部・下部構造の関係を規定)．又⑤資本論は(第一巻・第7篇)はホーケン制からシホン制への考えがのべられている．エンゲルスの仕事⑥は③の中の原始的民族的体制から国家ができるところを扱っている点を補強した．
今日は①，③及⑥でMarxの系統論をつかんでみたい．

§.1 「ドイツ・イデオロギー」の人類社会発展史．

はじめに「ドイツ・イデオロギー」にあらわれるがぎりで，Marxの人類社会の発展史をたどってみよう．

1. 人類は生活手段を生産する点で他の動物から区別される．＝基本的観点．
2. 生産構造が人類社会の構造や意識の構造を規定する．
3. 生産の発展は分業の発展に対応する．　分業の発展とは (i) 都市・農村の分離 及び (ii) 工業・商業の分離 をひきおこす．
4. 分業により分配が成立し労働と労働生産物との量的・質点な不平等の分配としての所有が成立する．

生産 → 分業 → 分配 → 所有

したがってMarxは大体人類社会は生活手段の生産によって特徴ずけられるが，その生産は人類社会や意識の構造を規定するから，生産の発展をみることが，社会の発展をみる上にキメ手になるとのべる．さらに生産の発展は分業の発展に対応し，分業をみようとすれば所有にまでポイントをおとすことができる．

そこで人類の発展史を所有でみてゆくのに，所有の諸形態はどんなものがあるか，大よそ次の5つにわける：——

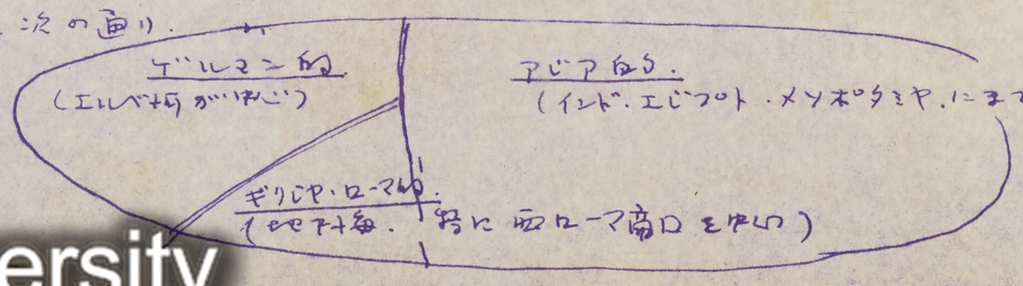
1. 種族的所有 ——— 殆んど完全な共有 (ホー芽的な私有をふくむ)
2. 古代的 〃) ——— 共有・私有の両立．——— ギリシヤ・ヨーロッパ・ゲルマン．
3. 封建的 〃)
4. 資本主義的 〃 ——— 純粋な私有　↓ より世界的なひろがり
5. 共産主義的 〃 ——— 純粋な共有

(注．——このように，地理的要因がでてくる点を指摘しておく．)
これが文献③「諸形態」になると
1. に対応するもの　アジア的形態
2. 〃　ギリシヤ・ローマ的 〃
3. 〃　ゲルマン的 〃　と名づけている．

(注．——地理的範囲が入っている．文献③では4.5.の段階はあつかっていない．)
これを要約すると，まず彼は土地所有の二つの基本的形態：(G) 共同体的所有＝Gemein-eigentum，(P) 私的所有＝Privateigentum．を考え，下のようになる．

1. アジア的所有では　(G) が支配的で
2. ギリシヤ・ローマ的 〃 〃　(G) > (P)．(まずPolisの公有地が基バンとなり，そのまわりにPriv. eig. が成立する)．
3. ゲルマン的 〃 〃　(P) > (G)．(まず各人がPivat eig. を占據し，これの補足部分としてGemein e. がある．)

その分布は，次の通り．



Kyoto University

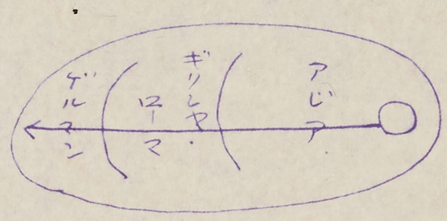
§.2. Marxの歴史観 —— Hegel的偏見：—

このようなMarxの考えの手がかりはHegel「Philos. der Weltgeschichte」である。

Hegelは唯心論的に精神の発展史としてのべたが、Marxは所有の発展としておきかえただけで、内容はにている。上記第一巻で方法論をのべ、それが、Marxの歴史観をソクバクしている。又Hegelの歴史観の~~基本の~~一つ「歴史は東から西へ進む」という基本的仮説にならっている。

（注）「歴史は東から西へ」——「（原文）世界史は東から西へ進んでゆく、何となればヨーロッパは世界史の終局であって、アジアは世界史の端初であるから。東方はそれ自身で全く崩壊的なものであるが、世界史においては一種特別の東方が存在している。なぜなら、たとえ地球は一つの球を形づくっているとしても、歴史は地球のまわりを回転するものではなく、むしろ一定の方向をもっているものであって、その東方がアジアであるから。外部の自然的太陽はここから立ちのぼり、西方は自己意識の内的太陽が立ち昇って、さらに一層輝かしい光輝をはなっている。」

このように18・19世紀に支配的であった「歴史は東から西へ」という世界観と、「ドイツ・イデオロギー」におけるMarxの三つの部分の特徴づけが一致する。



又次の点（世界史の発展は自由の発展の歴史である。＝Hegel）でもHegelとMarxと一致している。即ち、Hegel：Phil. d. Weltg. では自由の発展を

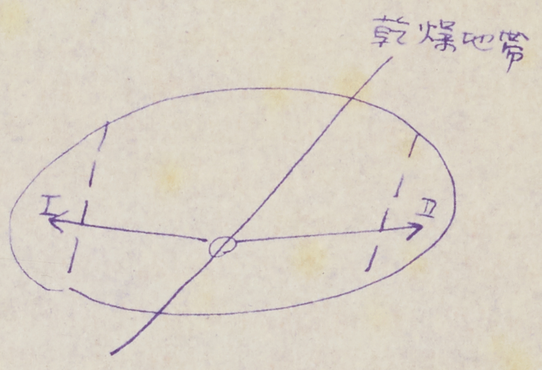
1. 支那人（東洋人）の世界 ——— 1人の自由。
2. ギリシヤ人 〃 ）——— 若干人の自由。
3. ローマ人 〃
4. ゲルマン人 〃

として、世界史の発展は精神の発展の諸段階であってそれは自由の発展の歴史であり、精神における最も重要な点は自由である。とする。そして、

1. では、1人の他所有者はいない、この上にのっかっているアジア的専制君主一人が所有者であり、他はすべて所有者でない。
2. では、ポリスの市民だけがPrivateig.をもっている。
3. では ドレイをつかっている。
4. では、(P)の方が(G)より優位であるが、Marxは資本制的生産に至ってはじめて完全な(P)ができると考える。だから所有の型でいくと、おなじゲルマン社会でも資本主義の成立に至ってはじめて(P)が生れる ＝ 自由の所分析に支配される所有が生れる。

このように大体のProcessがHegelとMarxと一致している。すなわちMarxにHegel的偏見が入っている点が重要である。

（注）Umesao氏は、乾燥地帯により第I、第II地域にわけられ、それぞれが又二つにわかれる。そしてそれぞれ乾燥地帯より歴史が進行する。（Umesao-Wittfogel的考え）。



(Im.) Marx、Hegelはなぜ発展が東から西へ進むかという事を、太陽が東からまわるような単純さで満足しているのか。

(Uy) その点が一番よわいようだ。これはこの研究会での問題だ。

(Im) 系統は論じても、分布は論じていない。

(Uy) 分布はぬけている。Morphologyだ。Marxはその Morphology を生産の発展であとづけた。その生産の条件としての地理的条件が明らかでない。われわれは一貫した方向づけ

$\boxed{\text{乾燥}} \longrightarrow \boxed{\text{湿潤}}$

であつかえる。（注：U氏はそれを分布で論じ、われわれは更にそのlogicまで入らねばならない。）

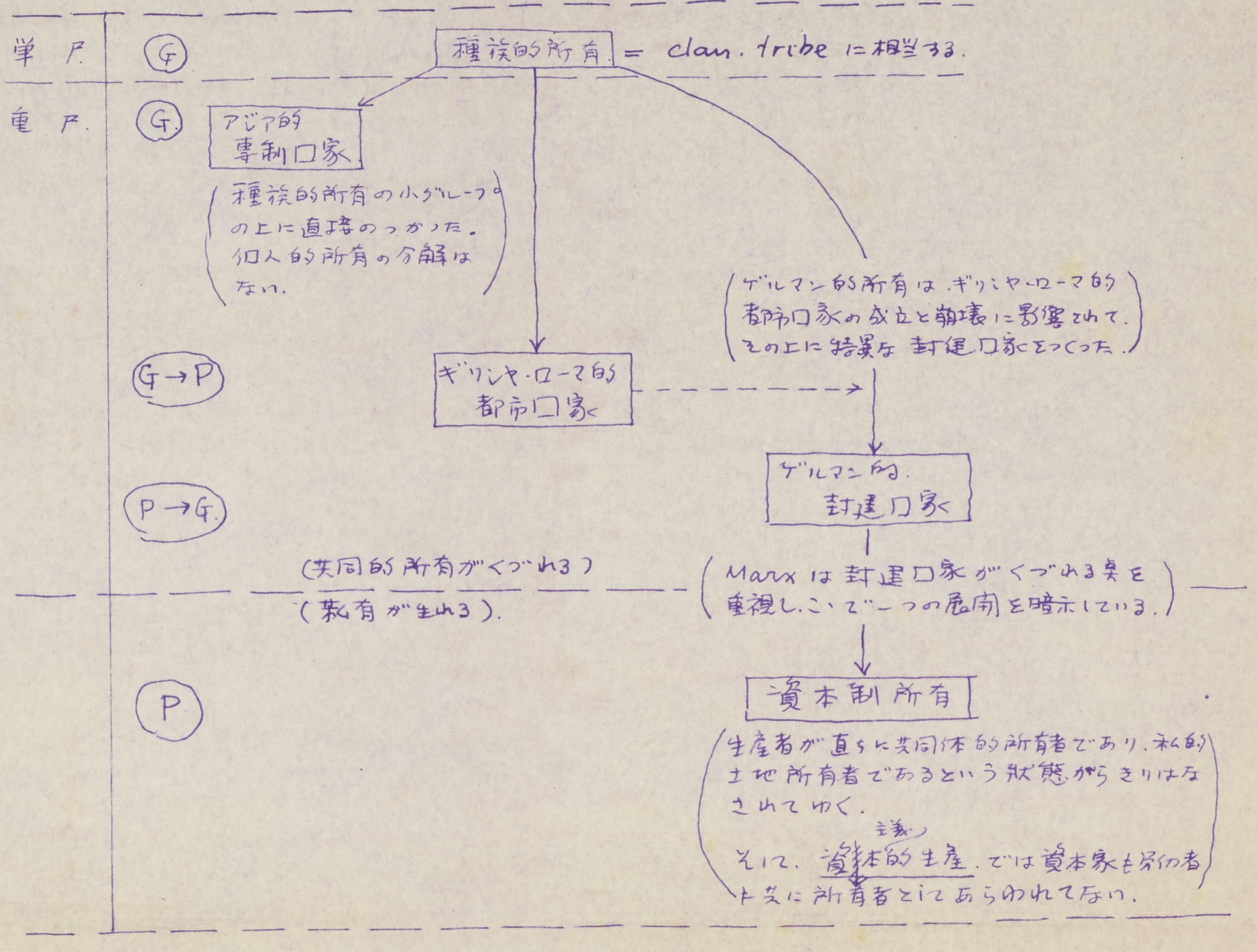
(〃). 最近の「共同体の研究（大塚）」との関係は一考を要する。

(Im). Marxの出発的はclan, tribeのでき上ったところからか？

(Uy) いや、それは —— 次表の通り。

Kyoto University

§3. Marx による人類社会発展史一覧. — Imanishi の質問(前ページ)に対して —.



§4. Stufe, Stufen-theorie に関する discussion: —

(Iiz) 大塚氏の考え「原始共同体」と「……」は ドイツ・イデオロギー にでているか.
(Uy) でていない.
(Iiz) Helenism の確立だけがメルクマールか?
(Uy) ボクは 大塚氏の考えを systematic に批判する. O氏は Marx を正直によんでいない.
なぜなら、ドレイ制、ノード制のキソとしてたく ギリシャ・ローマ的所有・ゲルマン的所有を考えるが、
(O氏は) Marx はその変質したものと考えた. すなわちどちらの場合も生産=所有者だった.
ギリシャのポリスでは 公有地の支配者であるとともに私有地の生産者だった. そして ~~農~~農夫(=ドレイ)は生産労働の主体でなく客体だ. ヌノードの場合も 土地と同様に売買されるものだった. だからこれらは 派生的形態 だという。
(Im) だから. アジア的所有からドレイ制, それからノード制になるという発展段階はないのいうのか?
(Uy) よくよんでいないが, ない.
(Im) だれがこの発展段階をいいだしたのか?
(Uy) O氏だ. アジア的 — ギリシャ・ローマ的 — ゲルマン的. をあきらかに stufe としていいだした.
この三つを Marx はどうおさえているか:

アジア的 ——— 生れながら土地に固着している(土着的).
ギリシャ・ローマ的. —— だんだん土地からはなれる.
いろいろの tribe の混合.
(個性がつよくなる.)
(個人的能力がみとめられる.)
ゲルマン的 ——.

(Im) その考えに関するかぎり Marx と Wittfogel とはムジュンしない. しかし日本で, はじめの種族所有から発展してドレイ制がでたと論ずる(日本の Marxist)ときのドレイは ギリシャ・ローマ的なものとしてのべているのか?
(Uy) Yes. そこには明白な Stufe があるとしている.
(~~Uy~~)(Im) Stufe をはっきりさせたのは Marx ではないのか?
(Uy) あのような.(日本の Marxist のような) rigid な考えはむしろ Stalin (1936年の論文)だろう.
(Im) Engels では多少とも Stufe の考えにならないか?
(Uy) 多少~~も~~なっている. Stalin がよんだ論文は Engels のみだから —.

Kyoto University

(Iz) インドでアジア的所有が英国の支配でホーカイするが、その後のことは何もかいてない。
(Uy) Marxでは「資本制に先行する諸形態」はすべて資本主義に直行すると考えるのが根本だ。
(Iz) だから発展段階説とのかみあいがわからなくなってきた。
(Uy) 基本的には生産者が共同的所有の主体である場合と、私有的所有の主体である場合の二つがある。
これ以上にStufeを展開させていない。
日本でもこの論がtypologyかStufentheorieかで異論がある。大ざっぱにいえば
大塚史学 —— Stufentheorie —— 日本史学の大勢。
ギリシア史学 —— typology。 となるだろう。
二つの単なる並列でもないし、又ゲンミツなStufentheorieでもない。(—— どこの社会でも、この二つのStufeを通らないといけないというStufeでもない)。—— logicalなStufeがある。
(G)支配は、では —— 資本制になりにくい
(G)dominat →(P)では 〃 に展開する可能性がある。
(P)dom. →(G)では 〃 への可能性が大きい。
このような形式は、下ほど自由のある度合が大きくなってゆくもので Hegelの考へにつらなる。
又Stufentheorieを確立したEngels, Stalinでは、アジア的所有をぬかして、
原始共産 → ドレイ制 → 原始的所有 → ギリシヤ・ローマ的 → ゲルマン的。
とつづけたが、Wittfogelもこれはギモン視している。
又、更に「経済学批判」の序文では、大ざっぱにいって経済的社会機構が進歩してゆく段階として次の生産様式をあげている。
アジア的, 古代的, 封建的, 近代的, ブルジョア的生産様式。
こうみると、人類全体からみれば、MarxもStufentheorieをとっている。
(Kat.) いかなる国家もすべてこのStufeを通るというようなゲンミツなStufeに対する思いこみは日本だけか?
(Uy) 大体そうだろう。
(Im) StufentheorieはやはりStalinの独創ではないだろう。だれかそれより前にアルハズだ。
(Uy) その辺は政治的事情もあるのでボケテいる。—「Russiaはアジア的か」というギモンに対するLeninのとった態度 ——。
(Kw). 「ロシアにおける資本主義の発達」はどうか?
(Im). アジア的, ギリシヤ・ローマ的, ゲルマン的所有と変化するにしたがってPotencyが高まるという点をもう少しMarx的にのべてほしい。

§.5 (1) 種族的所有, 家族.

(Uy). 主に分業についてのべる。まず「ドイツ・イデオロギー」でのべる。
第一段: 種族的所有 —— 単戸。
一民族が狩・漁、又は牧(せいぜい農)でくらす、生産の未発達な段階をいう。たゞし農の場合は大量の未開コン地が前提。
分業は未発達。社会構成は家族の拡張されたもの。
家父長的な種族の首長 —— 種族員 —— ドレイ。
ドレイは家族の中にあるもの。
人口と慾望が増加すると、外部との交通が拡張され、このケイカにより内在されていたドレイ制が展開する。
外部との交通の正常な一つの形は戦争であった。

(Im). Marxismの考えでは、「種族員」に「家族」の考えがあるのか? この点は石田氏も指摘しているように、文化人類学と正反対である。
(Uy) 「諸形態」ではこういっている。アジア的段階では自然発生的共同体 = 家族; 種族に拡大された家族, 又は諸家族間の婚姻によるもの等による共同体。
(Im) これはEngelsだろう (Uy) — Yes.
(Uy) Marxは種族的所有をバクゼンと家族の拡張でとらえている。
(Im) それにしても中心に家族というがイネンがある。

(Uy) 又、放牧状態が最初の形だ。種族共同社会、自然共同体は土地の共同的占取を前提としてあらわれる。人間が定着するに原始的共同社会がある程度変形される為には二つの条件がある。—
1) 種族的生活。
2) 外的条件。
(Im) Morganの原始乱婚をEngelsがとり入れるから「家族」の出方がおくれる。
(Kw) 放牧状態をはじめにおくのは、この方がnuclear familyがみつけやすいことと関係がある。
(Uy). ともかく、Marxのもっていた材料は少ないことを思うべきだ。
(Im) Marxの時代の方が常識的で健全だ。

Kyoto University

(Uy) 分業については「家族における自然成長的な分業」と「たがいに対立する個々の家族の…(?)…」にもとづいている。そして所有は分配によってうまれるが、不平等な分配としての所有の萌芽は、家族内において妻が夫に対してしたがうという点にある。

(Kw) すると分業の中には性別による(夫→妻)ような命令的分業と、職能的なものと区別しているか?

(Uy) あまり明白でない。

§.5 (2) ギリシヤ・ローマ的所有; 都市と農村 二重尸.

(Uy) 分業については、次は ギリシヤ・ローマ的所有 となる。二重尸。 基本的分業 — 都市と農村の対立。
都市と農村との対立は未開から文明へ、種族社会から国家への移行としてはじまり、現在までつづく。
この対立は同時に、精神的労働と肉体的労働との分業の最大の形である。

(Uy) [原文引用]「分業と私有とは同じ事である。分業は精神的・肉体的分業の別のあらわれるときから厳密に分業となる。物質的労働と精神的労働との分業の最大のものは都市と農村による分業である。又都市と農村との対立はたゞ私有制の内部でのみ存在することができる。」

(Uy.) つまり、「原始共産制から次の段階に至る所で分業が確立して、国家が成立し今に至る」と考える。ここの研究会の考え方と同じ。

(Im) マーケットができる~~のは~~ときはおそらく私有ヤロウネ?

(Uy) そうだろう。生産物に対する所有といういみで——

(Im) 「都市」というトコロまでイカンでも——

(Uy). だから Marx も動産に対する私有がまずはじまる、としている。
ところが、不動産私有が発展してゆかないと本当の私有が確立しない。これが発展すると、古代の共同体がくづれてくる。ローマもそれだ。

(3). 封建的所有について。—— (ドイツ・イデオロギーより引用)
古代が都市及びその小領域から出発したとすれば、他方は農村から出発した。ひろい地面に分散していた既存のまばらな人口は、ローマの征服者達によって何ら大きな増加をうけなかったが、それはこうした大きな出発点の(欠)……
封建的発展はローマによる征服と、当初これと結びついてなされた農業の拡大とによって用意された、はるかにボーナな地域ではじまる。(だから封建的な段階はギリシヤ・ローマ的な段階を条件としている。)

(Uy). 封建時代の大きな特徴は次の二つである;—
封建時代においては主要な所有は、一方では土地所有及びこれにしばられたノード労働、他方では職人の労働を支配する小資本をともなう労働であった。

§.6. 征服・国家論

(Uy) 彼は更に「国家論と征服」についてふれている。——
征服。—— 古代的所有から封建的所有の移行のところで、まずローマとふれあったゲルマン人においては戦争は正常な交通の一形態であった。人口増加が新しい慾望や手段をうみ、それが戦争をうむ形をとる。
もう一つの点は、征服は征服される対象によりあるていど制約される。うばいとる事はどこでもたちまちゆきずまって、もはやうばいとるものがなくなれば、生産がはじまらざるをえない。このように生産の必要がたちまち起って~~くることが~~まて、ここに定住する征服者達の共同体の形態が既存の生産力の発展段階に対応しなければならないことになる。だから征服して生産をはじめると、ここの社会の生産力の段階に適応しないと征服はできないわけだ。
封建制はドイツから既成のものとしてもちこまれたものではない。かえってそれは征服者の側からいえば征服そのものの間における軍事組織の中に起源をもつ。そして征服後にこの軍事組織が征服された国々の中にすでに存在していた生産力の影響によってはじめて本来の封建制がでてくるのだ。

(Kw) 地域的にいうとローマの南からのはたらきかけと、北の既存のものとのカケアワセで封建制ができたのだ。

(Uy) 要するに歴史の説明に生産力をはずすことはできない。

Kyoto University

(Uy) もう一つ 国家論 については. —— 分業がはじまると 但し人の特殊利害 とそれが支配する多くの人人の共通利害が生れ、その二つのムジュンにもとづいて、共通利害は 但別的利害からはなれて、国家としての独立の姿をとる。それは同時に、ゲンソー的な共同制として、全部の利益ではないが支配階級の利害とむすびつく。すまり国家は 支配階級の諸個人が彼等の共同利益を主張する形態である。

(Kw) 「アジア的」の場合は？ (Im) 不充分だ。
(Uy) 彼の共同利益とは 治水、カンガイのことだ。

(Hz) 「種族社会」に三つの細かい Differentia はあるか？
(Im) それはないのではないか。
(Hz) なければ「単系直化」だ。
(Im) ないから 地理的分布 がもんだいになる。
(Uy) 私有の大きさがちがう。
(Im.Hz) 結果論だ!!
(Uy). はっきりわかった事がうはっきりわからない気を考えるのは当然だ。
(Hz) だからそのはじめ＝種族社会、にちがいがあるのか？
(Uy) 彼は「諸形態」で 「アジア的形態」は個人は占有者であるだけで私的所有者では全くない、ギリシャ・ローマ的形態では所有が共同体的所有と私的所有の併行形態であらわれる。
(Im) それなら やはり「結果」ヤナ ——.
(Uy). 要するに アジア的. etc. のちがいをうみだす 種族的所有のちがいは説明がない。
(Hz) われわれにとって興味のあるのは 同じ種族所有といっても、それぞれちがう事だ。
(Kat.) 今のもんだいは「先行するのは諸形態か、一つの形態が？」ということだ
(Hz) どこの地域でも、はじめは アジア的 といっているのか？
(Uy). そうだ。区別していない。
アジア的専制主義は重戸で、アジア的種族所有（掌戸）の上にのっかった一つの deviation だとする。 —— この点は一般の Marxist がみのがしている ——。しかし種族的所有は今指摘の通り ~~ではも~~ でれも同じである。だから先にかいた三つのちがいがでてくるのが、種族所有の段階が 人それぞれにちがうかはきめていない。(ちがいがあるとすれば その移動性にみるべきだろう)
(Im) この点は Wittfogel の方がするどいている。
(Uy). たしかにこの点をボう書がやるべきだ。しかのは分布でかたづけたから ——.

§.7. 国家論（つづき）—— 所有と Administration.

(Kw). 封建的所有で、所有と Administration のカカイメがあいまいだ。又所有の中にいくつも Style があって、近代的な私有とのカカイメが明瞭でないのが封建的所有の特徴だ。
(Im) Asia的 には私有はあったか？
(Uy) アジア的、という時は、種族所有が温存されやすい、という。アジア的専制 に至ると、Wittfogel はふたつにわけて、単純な専制国家 と 開かれたそれ とした。しかし私有ができても、アジア的専制国家では弱いという、とにかく私有をへらそうとする方向に国家権力をはたらかした。
Marx の場合。古代的形態を二つにわけ BC400～300 ではまだ私有は確立をしないが、後期では確立する。
(Im) Administration と私有、—— 例えば 私有制が認められるようになり自分の土地を下りに売ることはできるが、それを下りの国に売ることはできるか？
(Uy) ローマ法ではできない。—ローマの市民権をもつ人しか所有権はない。
(Im) 今日はどうだろう。
(Kw). アメリカ人が日本の土地を買っても アメリカ領にはならない。
(Im) だから 私有と Adminst. とはからんでいる。
(Uy) しかし ローマの場合 Administrator と私有者とは重なっている。この点は私有と分解するトコロで古典的段階と異なる点を注目する。
それから封建論は 資本論（3vol. 末等）にくわしい。 —— 土地所有は三つの Style にわかれ (1) 労働地代 として currency 労働をとる場合。(2) 物納地代 (3) 金納地代 があり、これにより所有のし方が異なる。それ 物納にかかわるところで Adm. と私有の分離がおこる。
(Um) Adm. は封建時代の領主から資本制における近代国家にかわる。だから、土地を売ったからといって Adm. がかわることはない。
(Kw). 封建的というときにもつ image は Admin. にも所有にも Style がある。

Kyoto University

(Uy). 封建制の解体から資本制へのうつりゆきはかなりくわしい。
こゝで大事なことは、Marxのやったのは経済学で、人間全体をやったわけではない。だから口家についてはかなり飛躍がある。（資本論）。

~~(Hz). 口家の独立は世界口家になればなくなるが。~~

(Im) だから Marxは種族社会から封建までは経済にむすびつけてうまく説明できているが、封建制から資本制にうつる所で経済だけでは現実にあわない。

(Uy). 彼はドイツ・イデオロギーに「人間・種族の肉体的条件・自然的条件を一応シャシェうして議論をすすめる」といっているが、そのシャシェうが問題だ。人类学はそうしない。

(Im) 特にこの研究会ではじめから $\boxed{\text{主体性}}$ をうちたて、いつでも主体性 = Administrationのハンイが生きてこなければこまる。だから封建制から資本制にかわったけれども、口はいぜんとしておたがいに利害をあらそっている。もし今全部共産口家になったとしても、口家があるかぎり口家同志で利害がちがうことは同じであろう。

(Tan.) 専制口家・都市口家において生産のunitが一応できている。Germanの場合、一つの領主のしめるハンイを一つのunitと考え、それがAdmin.のハンイとなるか？

(Uy). それはぬかしている。

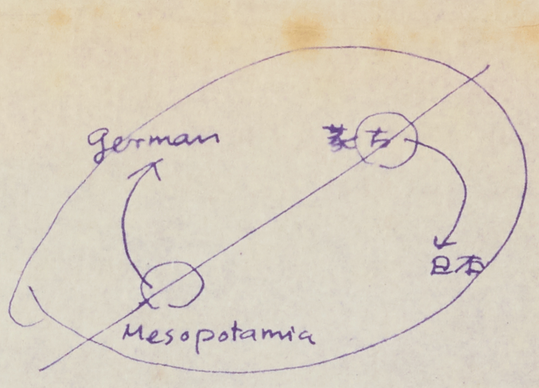
—— 応この辺で $\boxed{\text{今日のまとめ}}$ をしておこう：——

ここまでの所で、研究会にかみあわせてみると、

(1) アジアからギリシヤ・ローマをへてゲルマンへ、というHegelの考えの上にのっている事。しかもこれがStufeである。
(2) ドレイ制・ノード制は古代・ゲルマンの事性でなく、派生形態と考える。
(3). 種族的所有のdefferentiaはない。

—— これに対して、$\boxed{\text{われわれの態度}}$ は：——

(1). 普通アジア的といわれているメソポタミアからゲルマンへうつるprocess（未地域）と、モンゴルから日本へと展開するprocessとを主軸にして分布論・系統論をかみあわせること。
(2) 又その移行のロジックをやる。



—— $\boxed{\text{もちこしたもんだい}}$（Im. 提出）——

(1) 資本制の展開する辺の諸問題。— 経済だけでは現実にあわない。
(2) Administrationのはたらくoptimum sizeがもんだいだ。
(3). Admistration → Systemの完備、ということ。
(4). ヨーロッパの小口家群の成立、ロシヤ・中口という大口家の成立のもんだい。

—— 以上で主題のメモをおわる。
—— つづいて補足的discussion.（別紙につづく）。

きようのMottoは：——
比較はこまかく、スケールは大きく!!。

1960.2. Wazaki.メモ.